て坊を巡りて覓むれども病人無し。怪びて嘿然す。彼の病みて呻ふ音、夜を累ねて息まず。忍ぶること得ずして、起きて窺ひ見れば、呻鍾堂に有り。実に彼の像なりと知る。信行見て一は怪び一は悲ぶ。時に左京元興寺の沙門豊慶、常に其の堂に住む。彼の沙門を驚かし、室の戸を叩きて白さく「咄、大法師、起きて聞くべし」とまうし、具に呻ふ状を述ぶ。茲に豊慶と信行と、大に怪び大に悲び、知識を率引て、捻り造り奉り畢り、会を設けて供養す。今弥気堂に安置きて、弥勒の脇士に居ける菩薩是れなり[四] 左は大妙声菩薩、右は法音輪菩薩なり。誠に知る、願はば得ずといふこと無し、願ひて果さずといふこと無しといふは、其れ斯れを謂ふなり。斯れまた奇しき表の事なり。

法花経を写し奉る経師邪婬の為に現に悪しき死の報を得る縁　第十八

丹治比経師は、河内国丹治比郡の人なり。姓は丹治比なり。故を以ちて字とす。其の郡の部内に、一の道場有り。号けて野中堂と曰ふ。願を発せる人有り。宝亀二年辛亥の夏六月に、其の経師を請へて、其の堂に法花経を写し奉る。女衆参り集りて、浄き水を以ちて経の御墨の水に加ふ。時に未申の間に雲段れて雨降る。雨を避けて堂に入る。堂の裏狭少し。故に経師と女衆と同じき処に居る。爰に経師婬心熾に発り、嬢の背に踞りて裳を挙げて婚ふ。閑の間に入るに随ひ、手を携へて倶に死ぬ。ただし女口の漚を嚙み出して死ぬ。晰に知る、護法の刑罰することを。愛欲の火身と心とを燋すといへども、婬心に由りて穢しき行をせざれ。愚人の貪る所は、蛾の火に投くが如し。所以に律に云はく「弱なる背のひとは自づから面門に婬く」とのたまふ。また涅槃経に云はく「五欲の法を知らば、歓楽有ること無し。暫停ること得ず。犬の枯れたる骨を齧るが如くして飽厭く期無し」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

産生みたる肉団女子と作りて善を修ひ人を化ふる縁　第十九

肥後国八代郡豊服郷の人豊服広公の妻懐任む。宝亀二年辛亥の冬十一月の十五日の寅時に、一の肉団を産生む。其の姿卵の如し。夫妻祥にあ

一未詳。本説話以外に所伝をみない。
二大法師位は、天平宝字四年(七六〇)に制定された四位十三階の僧位の第一位。信行の、豊慶に対する敬意をあらわす表現。
三↓上巻三十五縁。
四吽迦陀野儀軌・中に「又作二随心曼荼羅一、中央弥勒菩薩、左方法音輪菩薩、右大妙相菩薩、四方四大天王」、法華伝記・七ノ七に弥勒菩薩の兜率天内院での説法を述べて、「時有二菩薩一、即是侍者、一名二法音(苑)一、とする古写本も存する)林、二名二大妙相一とみえる。「大妙声」「大妙相」、「法音輪」「法音林」「法苑林」、どの表記が本来のものか不明。本説話に「大妙声」「法音輪」とするのは、本説話が音声にかかわっての説話展開をみせていることに関係する。本書では、声をあげる仏像は弥勒像が多い。↓中巻二十三縁、二十六縁、下巻二十八縁。

第十八縁　悪業についての現報説話。今昔物語集・十四ノ二十六に書承。
五未詳。本説話以外に所伝をみない。
六未詳。本説話以外に所伝をみない。
七大阪府松原市、南河内郡美原町、大阪狭山市、大阪市東住吉区、平野区、藤井寺市、羽曳野市、八尾市、堺市あたり。
八野中郷に所在。羽曳野市の野中寺(ﾔﾁｭｳ)との関係は不明。
九七七一年。
一〇「未」は午後一時から三時のころ。「申」は午後三時から五時のころ。「未申之間」は午後三時どろか。
一一↓中巻十一縁。
一二「便握二陽神之手一、遂為二夫婦一」(書紀・神代上)。「妹が手を取る」は歌垣の歌の慣用語(土橋寛)。↓上巻二十八縁。

一三↓中巻三十五縁。一四↓中巻十三縁。
一五梵網経古迹記・下本(攷証)。
一六梵網経古迹記・下本に「律云、弱背自婬二面門一」(松浦貞俊)。「弱背」は、柔軟な背なかの男。「面門」は、口。自分の口を用いて自慰する。
一八大般涅槃経・光明遍照高貴徳王菩薩品。ただし、「無二飽厭期一」を欠く(攷証)。

第十九縁　三宝絵・法四に引用。三宝絵より本朝法華験記・下・九十八に書承。
一九肉のかたまり。底本訓釈「肉団(シ、ム良、下音断)」。
二〇熊本県下益城郡松橋町豊福。
二一未詳。本説話以外に所伝をみない。「豊服」は和名抄では「豊福」と表記されている。いま「福」と「富」とが同意であること(釈名・釈言語「福、富也」)に注意するならば、豊富、豊福、猴聖、というイメージの結びつきは、秀吉の「豊臣」氏創始を連想させる。「とよとみ」は「豊富」という表記をまず連想させるものであろうから。
二二七七一年。「寅時」は午前三時から五時のころ。詳細な日時が記述されるのは、この女子の誕生が文書にされ、そこに詳細な日時が記載されていたのであろう。下文の「見聞人、合二国無レ不レ奇一」も文書の流布にかかわる記述であろう。
一原文「不レ俄」。八か月という期間を長いと判断しての叙述(「徐々に」の意か)なのか、短いと判断しての叙述(「短時間を経ずに」の意か)なのか、不明。不思議な誕生をしたかぐや姫の成長は「三月ばかり」(竹取物語)、「七日」(古今集為家抄)とされる。
二頭部と頸部のあたりに肉が盛りあがっている。